森の名手・名人シリーズ No.17

名人　和田　利治(71)　岐阜県大野郡白川村
聞き手　牧野　有里　滋賀県立長浜農業高等学校3年
平成16年取材

「森の名手・名人」とは、森に関わる仕事や地域生活に染み込んだ営みのうち、優れた技をもってその業を極め、他の模範となっている達人で、毎年、全国で約100名が選定されています。岐阜県においては、現在、33名の「森の名手・名人」がいます。
この「森の名手・名人」を「森の"聞き書き甲子園"」に参加した高校生が「聞き書き取材」をしたものの中から誌面の関係上要点を抜粋したものです。なお、年齢、住所、学年は取材当時のものです。

屋根葺き

白川村 合掌造り民家のすべて

▼和田利治さん

1. 屋根葺き職人

ここの村の人はみんな一緒なんですけど、一年に三軒くらいずつ屋根の葺き替えをやるわけですね。それで、みんなが屋根葺きの作業を手伝うわけです。父親がそういう職業的なことをちょうとやっていましたので、だんだん、屋根ふきの、おもな仕事をやらされるようになったわけです。このおもな仕事という技術的なことは、みんな嫌がるんですね。責任的な部分もあるもんで。そういう関係で、みんなに、お前やれって言われちゃって、責任的なところへついてしまったというような感じですね。

屋根の葺き替えとは、古いかやを落として、中の資材を取り替えたり、縄は結び変えをして、新しくかやをのせていくというのが、基本的なことなんです。ただ、この基本的なことが頭の中に全部入っていないと、すべてがやれないもんで、そこまでには、だいぶ時間がかかるんですね。

だいたい春の4月・5月くらいに、葺き替えがあるわけです。周りの田んぼや畑に、植物が植わっていないときにやらないと、カヤの運び込みとか、ふみあらしとかがあるもんでね、なるべく雪が、ここは4月のはじめくらいまで雪がありますからね、この雪が消えたじぶんに、葺き替えをするというのがここのならわしなんです。

昔はほとんどね、一日で葺きあげたんですが今は、雨が降ってくればシートをかぶせられますので、ある程度の行程でやめようとおもえば、やめられるのが事実なんです。私は、何が何でも我さきにと仕事をしたもんで、そういう面が苦しかったですね。

妻部分を担当するのが、一番大変な仕事なんです。形を作らないかんもんでね。横の部分と前の部分のつきあわせを上手にやっていくというのが、一番大事なことなんです。それによって、屋根のできが決まってくるもんで、一番大変な技術なんです。

やっていてよかったと思うのは、仕上がってきれいになったときが、一番。ああ、この屋根はいい屋根になったなと思ってね。

2. 材料

「ヨシ」

―ヨシはカヤよりも長持ちするんですね。水に強い植物ですから。あいにくこの辺にはヨシがわりとないんです。ですから屋根に使うだけの材料は昔からないもんで、ヨシは使われていませんけど、ヨシ葺きでもやったことがあります。

ヨシの場合はねえ、葺くときものすごく大変なんですね。もうバラバラと、1本分ですから。それにヨシはすべりますね。ですから落ちていってしまうんです。ヨシの場合は小束にして、合わせていかないとやりにくいんですね。カヤの場合は、葉がけっこう茂っていますので、それはそのまま使っていけるんですけど。

「カヤ」

―カヤはね、場所によっては、太かったりまた、まばらだったり、日本中どこにでもあるんですが、性質が違うんですね。長さが違ったり密度が違ったりするもんで、それなりにちょっと手入れをしないことにはダメなんですね。普通にあるのはそれでいいんですけど、やっぱり手入れをして、毎年とるようにすると、割合良質なカヤが取れるようになるわけですね。

屋根に使うカヤは、なるべく細いほうがいいんです。同じ平方メートルの中に、いっぱい入ったほうが雨漏れも少なくなるもんで。あんまり太いカヤではね、一本腐っても、大きな穴があくわけです。今、村の森林組合ではね、7～8年前からコガヤというカヤを育てて、ようやくね、1千束くらい取れるようになってきたって話してました。なかなか育てるのも時間がかかるんでね。それまで根気にやっぱり夏は、下に生えてくる草を刈ったり、いろいろしないときれいに育たないもんでね。

刈り取ったものは、10日から15日間くらい外にたてといて、後は倉庫の中に入れて、しまうわけですね。今は村で建ててくださった、大きな倉庫が2つあって、だいたい2万束くらい入るんです。完全に干しきったものは倉庫の中に入れとけば、3年や4年たっても大丈夫なんですね。

ここではカヤの束を計算で割り出すのに、ひとしめという単位があるんです。2けん縄でカヤを横にして、重ねたものをまとめるんです。わっかにしめて、その中に入る量をひとしめというんです。ひとしめが、一坪の単位、6尺かくになるわけです。屋根一坪に3しめ使うというだいたいの、基準があるわけですね。ですから屋根の大きさによって、100坪あるんなら、かける3しめですから、300しめ要るということなんですね。そのひとしめにだいたい30束から35束くらい入るんです。束の大きさで変わってきますのでね。家の大きさをはかって、この家は60坪あるから6×(かける)100だから6000束くらい要るんだなと。そういうような計算で割り出すわけですね。

「マンサク」

―昔はやっぱり釘とか針金とかはなかったもんで、針金のかわりにネソという潅木を使ってるんです。マンサクの木なんですけど、これは春一番に黄色い花が咲くマンサクですね。よくねじって繊維を割って止めていくわけですけど、これをよく昔の人は考案したなと思うぐらい、構造的にはうまく使ってありますね。ほかの木ではうまくできませんけど、マンサクの木はできるんですね。

3. 伝統的建造物群を守る

もう30何年前なんですけど、戦後ここの部落の中に、大きな家が何軒もあったんですね。それが身売りされて、外へ出て行ったんです。ここで解体して、よそへもって行って、建てるんです。そして、商売をするわけです。そうすると、珍しいものでものすごくもうかるわけですね。

その後また、そういう話が徐々にいくつも出てきたんです。そのときにやっぱり、これはこの村で残しとかないかんぞと、みんなで守ろうじゃないかという運動が盛り上がりまして、売らない・貸さない・買わさない、という3原則をもとにみんなが団結しました。ずーっと30何年守ってきまして、昭和51年に国の伝統的建造物群という指定を受けました。今の世界遺産になった当時、もっと以前の姿に戻していきたいというのがみんなの願いなんですけど、そういうのはなかなか難しいですね。

今でこそ、こういう草屋根が珍しくなったわけですね。だけど、昔の人たちは、この草屋根しかなかった。庶民の生活のなかでたやすく求められるものがカヤだったんです。ですから、もういたるところに、カヤ葺きの屋根があったわけです。これはねぇ、本当に夏は涼しいんですね。冬はこの辺、雪で周りが囲まれますので暖かいとはいえませんけど。夏はほんとに快適な生活ができますね。だけど、長持ちするって言っても、3・40年に1回は葺き替えないけませんし、みんなにけいえんされるのはそこなんですね。だけどこういうものは残して、一応先祖がこういう形の中に住んでいたんだよということなんですからね。トタン屋根ばっかりになってしまうと。みなさん、もう見ようと思ってもこれを見られないわけです。

うちでだいたい100年ちょっとなんです。明治の終わりぐらいに建ったんで。町の中の家はだいたい200年から250年、古い家は300年から350年ぐらいという家があるわけです。もう、かなりいたんできまして軸部修理をされています。やっぱり下がね、ここは石場立てですので。石の上に柱がたつんですね。それで、石の部分が腐ってくるわけです。別に水がつくわけでもない、からからなんですけど年数がたつと、この接触部分が腐ってくるわけですね。この部分をきりずいにして、家を持ち上げて、ちょっとした部分を大工さんがなおしてくれて、そういう部分的ななおし方で、長いこともたせるということで、今やっていますね。

▲村内の人が集まって行う屋根葺き作業の様子

4. 技術伝承

これを維持していくのは大変なんですね。今は、補助金をいただいて守っていけるだけで、とてもじゃないけど普通の一般の家だと、これを守っていくのは大変ですから。この屋根葺きの技術というのはね、やっぱり数あって、職人として食べていけて、初めて守られるんですね。だけどそれが、結局仕事がなければ、その職は絶えていくわけですね。職人さんが育っていくような環境で、造ってもらわない事には。

その技術伝承がされていないと、もうできませんからねぇ。その辺がやっぱり難しいところなんですねぇ。

1年に、春先3軒くらいしかないわけでね、葺き替えが。そうすると、「結」という「助け合い」の制度でやりますので、よくでたって、1週間くらいしかないわけですね。技術的なことを1週間でおぼえて、次の年まで技術的なことをおぼえているかというと、なかなか覚えられないわけね。毎日やることによって、技術的には磨かれ、鍛えられていくんですね。

まともに仕事ができるというのは、十人ないがいですね。若い人はたいがいのことはやれるんですけど、妻側、やっぱり技術的な面がいるんでね。そういう技術伝承をしながら、代をついでいるわけですね。

▲きれいに葺き替えられた合掌家屋

名人　和田利治（わだとしはる）さんのプロフィール

●生年月日：昭和8年2月19日生まれ
●出身地：岐阜県大野郡白川村
●職　業：屋根葺き職人
㈲白川郷カヤ屋根技術舎の取締役。伝統を合理性の上からも、現代にどう伝え残すかを日々考えておられる。

※原本は長文のため、文章の一部を割愛しています。

【森の名手・名人編集担当
㈳岐阜県緑化推進委員会　佐藤正吉】